古事記では死んで黄泉に行くイザナミが日本書紀では死なない——両者を別の神話として読む画期的論考

古事記と日本書紀

「天皇神話」の歴史

神野志隆光

143
講談社現代新書

講談社現代新書　1436

古事記と日本書紀

一九九九年一月二〇日第一刷発行

著者——神野志隆光

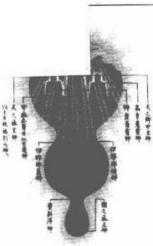
©Takamitsu Konoshi 1999

発行者——野間佐和子　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二—二一　郵便番号一一二—八〇〇一
電話（編集部）〇三—三九四五—三三二一（販売部）〇三—三九四五—三六一六（製作部）〇三—三九四五—三六一五
装幀者——杉浦康平＋佐藤篤司
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
（定価はカバーに表示してあります）Printed in Japan

〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

N.D.C.913　212p　18cm
ISBN4-06-149436-8　（学一）

¥640-



古事記と日本書紀

「天孫降臨」の神話史

学院图书馆
书章

社現代新書

はじめに

『古事記』『日本書紀』は、古代文学の代表として、その名は周知の作品である（読んだことはなくてもだれでも名だけは知っている）。『古事記』は七一二年に太安万侶（おおのやすまろ）が、稗田阿礼（ひえだのあれ）の「誦（よ）み習」っていたものをもとに、完成したといい（序文による）、『日本書紀』は七二〇年に舎人（とねり）親王（しんのう）らによって完成奏上された。ともに文学史の先頭に位置づけられ、古代の人々の心や生き方を語るものとして、古典の教科書教材としても取り上げられる。

しかし、ことは、古代の問題におわらない。両者は、古典としてずっと仰がれ続けてきたのである。言い換えれば、わたしたち日本人にとって意味をもつものであり続けてきたのである。日本の精神史の核となってきたといってよい。

『古事記』『日本書紀』がそのままで意味をもち続けたというのではない。意味を更新して生き続けてきたのである。解釈を加えながら、その時々に新たな意味を引き出してきた。『古事記』『日本書紀』を新しいテキストとして作り直してきたのだといってもよい。その、受容というよりもっと積極的な、更新の営みは、織り直すと呼ぶほうがふさわしいだろう。『古事記』『日本書紀』に注釈を加えたり、それらを再構成して新しいテキストを作り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

出したりして、織り直すのである。そうした営みが、『古事記』『日本書紀』の、古典としての歴史であった。その歴史を受けて、現在のわたしたちの古典として『古事記』『日本書紀』があるわけだ。

本書は、そのようにして生きてきた『古事記』『日本書紀』の歴史を、見渡すことをめざす。はじめに本居宣長（もとおりのりなが）の『古事記伝』を取り上げてみた。『古事記伝』は、これも名だけはだれでも知っていて、『古事記』を古典として確立したとされている。宣長にとって『古事記』はどのような意味があったのか。そこからはじめて、宣長以前にさかのぼり、中世、古代へとすすめてゆくやり方を取った。そして、どのようにして近代における古典としての『古事記』『日本書紀』が作られ、いまのわたしたちの『古事記』『日本書紀』にどうつながっているのかを見届けようとした。従来、古代の範囲だけで扱われることが多かった『古事記』『日本書紀』を、全時代を通して見ることの意味は小さくないはずだと考える。

章立てでいえば、第一章が宣長、第二章が中世、第三章から第七章までが古代、第八章が近代、をそれぞれ扱う。古代が過半をしめるのは、『古事記』『日本書紀』そのものについてページを多く割いたためである。取り上げるところは神話を中心とする。問題が一番あらわに出てくるところだからである。

『古事記』『日本書紀』の歴史を、いわば思想史としてとらえ直したのであり、全体として

一つながりであるが、各章は、章題として示した主題ごとにまとめてあるので、独立して読めるものともなっている。どの章からでも、関心のあるところから読んでもらえればよい。『古事記』『日本書紀』に載る神話的物語について、まず知りたいというならば、第四、五章から読みはじめてもらえればよい。また、『古事記』『日本書紀』は訓み下し文とした上で現代語訳をつけ（『古事記』『日本書紀』そのものを読むきっかけとしてもらえれば幸いである）、宣長の引用などにはそのつど要旨をつけて読みやすくした。古文の原文になじめないならば、そこはとばして読んでもさしつかえない。まとめとして図式化することもかなりとり入れてみた。とにかくページをひらき関心のもてるところを見つけだし、そこから読みはじめてもらえれば、本書の意図は受け止められると信じる。

目次

はじめに　3

第一章　本居宣長『古事記伝』をめぐって……11

1　「古言」をもとめる
2　自己確証の営み
3　倫理としての「物のあはれ」
4　世界の物語の創出

第二章　中世の『日本書紀』……33

1　『日本書紀纂疏』における『日本書紀』

2　「同時所成の世界」という自己確信
3　アマテラス＝大日如来という言説

第三章　古代天皇神話……55

1　人間のはじまりについて語らない神話
2　天皇につながる神の物語
3　高天原という世界をもたない『日本書紀』

第四章　『古事記』の神話的物語――ムスヒのコスモロジー……81

1　「天地初発」の神々
2　働き続けるムスヒ
3　皇祖神アマテラス
4　降臨神話とアマテラス

第五章　『日本書紀』の神話的物語――陰陽のコスモロジー……109
1　「一書」の問題
2　天地のはじまりから語る物語
3　陰陽の原理による世界の物語
4　日神にとどまるアマテラス

第六章　多元的な古代天皇神話……135
1　〈一つの神話〉という誤解
2　人麻呂歌と『古事記』『日本書紀』
3　祭祀と神話
4　帝国的世界を確信するための『古事記』『日本書紀』

第七章　神話の一元化……163
1　『古語拾遺』――神器の神話の成立
2　講書と『日本書紀』の変換
3　「日本紀」の広がりと『先代旧事本紀』

第八章　近代国家における『古事記』『日本書紀』……189
1　「日本神話」の成立
2　天皇制国家の神話
3　生き続ける「日本神話」の制度

あとがき　210

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

【第一章】本居宣長『古事記伝』をめぐって

1　「古言」をもとめる

本居宣長の『古事記伝』をきっかけとしてはじめよう。

『古事記伝』は、宣長が生涯をかけた『古事記』の注釈書としてよく知られている。たしかに、『古事記』について注をつけるものだから注釈書といってよい。ただ、その実際に即して見てゆくと、『古事記』という書そのものの理解というより、『古事記』のもとにある「古言」、つまり、『古事記』で文字化される前の、元来のことばが、宣長にとって問題の本質だったということがわかる。

具体例をあげよう。須佐之男命（スサノオ。以下、神名は原則としてカタカナで表す）は、黄泉（よみ）から戻った伊耶那岐命（イザナキ）が身を洗い清めたときに、天照大御神（アマテラス）・月読命（ツクヨミ）とともに出現した。この三神はイザナキから統治すべき領域を託される。アマテラスは高天原（たかあまのはら）（タカマノハラ・タカマガハラとよむ説もあるが、訓注に従ってタカアマノハラとよむ）、ツクヨミは夜之食国（よるのおすくに）、スサノオは海原の統治を命じられた。しかし、スサノオはその命令を果たさないで泣きわめき、山を泣き枯らし、河や海を泣き乾してしまい、そのために世界には悪しき神の声が満ち、あらゆるわざわいが起こることとなった。すべての秩序

が失われ、混乱に陥ってしまったのである。原文では、その混乱のさまを「是以、悪神之音、如狭蠅皆満、万物之妖、悉発。」と表現する。宣長は、その「悪神」を、アラブルカミと訓むべきだという。『古事記伝』（本居宣長全集第九巻～十二巻、筑摩書房、一九六八～七四年）にはこうある。

書紀神代下巻一書、皇御孫命の天降坐むとする処に、葦原中国者、磐根木株艸葉猶能言語、夜者若熛火而喧響之、昼者如五月蠅而沸騰之云々、喧響此云二泍等娜比一、五月蠅此云二左廢倍一、また本書に、彼地多二有蛍火光神一、及蠅声邪神一、復有艸木咸能言語、とある同処を、此記には、葦原中国者云々、於二此国一道速振荒振国神等之多在云々とあり。此を合せて考るに、かの御孫命の将二天降坐一時に、此葦原中国の有状を云ると、今此の状と全同じ事なり。さればこの悪神も、阿羅夫流神と訓べきなり。書紀の右の邪神も、又異所に邪鬼など有も、みな阿良夫流神と訓べし。旧訓は字にかゝはりて、古言にかなはぬこと多し。

「古言」のもとめかたがわかりやすくあらわれたところだが、その宣長の論理を解説すれば次のようになろう。

天孫降臨において、降臨以前の葦原中国の状態を述べる『古事記』『日本書紀』を合わせ見ると（『日本書紀』を排除するわけではないことはほかでも同じだ）、「邪神」＝「道速振荒振国神

等」（勢いはげしく、従わない神たち）によって、五月ころわき騒ぐ蠅のような騒がしさのなかにあるという。それは、ここでスサノオによってもたらされた事態と同じことだと認められるのである。従って、それをもたらすもの＝「悪神」「邪神」等は一つのことばで表現されたもののはずだ。「悪」「邪」というのは、漢字によって意味づけようとしたものであり、そうした字にこだわるのでなく『古事記』に「荒振神」とあるのを元来の「古言」と見るべきだと、宣長はいうのである。

『古事記』の用字に即していえば、「悪」はアシキと訓む（この訓みは、さきの引用のなかに「旧訓」とあったように、写本・版本にずっと付けられてきたもの）ほうが無理がなく、アラブルと訓むには無理がある。アラブルというときには「荒」字を用いるのである。しかし、宣長にとってそうした批判は意味がない。宣長は、字にこだわって「古言」を見失ってはならない、大事なのは借りた字ではなく、「言」だというのである。『古事記』の用字がどうであろうが、秩序の混乱をもたらす神として、「アラブル神」でなければならぬのである。

文字にこだわりすぎては誤ると、宣長は繰り返しいう。たとえば、「伊耶那岐命」のごとく、名の下に付ける尊称「命」は、字の意味とかかわりなく、「御言と云に此字を書るを、言の同じきまゝに」借りて用いただけだとして、「言だに違ねば、文字の義には拘らず、左に右に借て書るは、古の常なり」という。この類の発言が『古事記伝』にはくり返される

のだが、みな同じことである。

文字の向こうには、いにしえの、純粋な自分たちのことば（「古言」）がある。いかに文字という覆いを取り去って、そのことばを見出すかが、宣長の課題なのであった。『古事記』を開けば直ちに「古言」の世界があるわけではない。文字という覆いが掛かっていることは『日本書紀』と同じなのであり、その覆いを取って「古言」をもとめる必要がここにもある。ただ、『古事記』の場合、「古言」をそのまま書こうとしている。

彼（『日本書紀』）はもはら漢に似るを旨として、其文章をかざれるを、此（『古事記』）は漢にかゝはらず、たゞ古の語言を失はぬを主とせり。

と、『日本書紀』は漢文ふうに文章を飾るが、『古事記』はただ「古」のことばを失わないことを中心とする、という。

「すべて意（心）も事（ことがら）も、言（ことば）を以て伝るもの」である。だから、「上代の実（真実）」をもとめるためには、『日本書紀』でなく『古事記』を読まねばならぬ。実際には、『日本書紀』とともに『万葉集』などを総動員し、あるべきことばをもとめて訓みをつけることとなる。そうした作業を通じて、はじめて「古言」によって表された事がら（「古伝」）と、いにしえの、けがれのないまことの心（「古意」）とを得ることができる、というのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton